

地域福祉に関する意見交換会

平成 27 年 8 月 26 日（水）19 時から
鈴鹿市社会福祉センター2 階 会議室

A 班

青年会議所（5 人）、行政（市 2 人、社協 1 人）

青年会議所の方々から出た意見

○まちづくりには、市民、行政、事業所のそれぞれの関係性を理解すべき。

○青年会議所の理念である「明るい豊かな社会」というのは地域福祉計画の理念と通じるものがある。

○市民の方からのニーズが多彩になっているとあるが、一步間違えればただのわがままになっているものもある。行政は苦情受付場所で文句を言ったらなんとかしてくれると思われていないか。そもそも行政の政策に一般市民はあまり興味がない。行政からの情報発信のやり方を考え直し、そういった市民の意識を変えていく必要がある。

○子どもの教育には、学校教育、家庭教育、地域教育がある。その中で地域教育が欠けてしまっている。子どもはいるのに、地域の子ども会に入らない。地域の行事に参加しない。子どもは参加したいと思っても、親が面倒に感じている。山場、町場の地域性の違いもあるだろうが。特に海側は災害の観点もあり、新たに住みはじめる人がいない。結果、外国人が多くなり、そういった人たちは地域の行事には参加しない。下校時に防犯の面からも地域で見守りをせざるをえない現状、事業所と行政が協力して地域の力を高めていく必要がある。

○自治会に加入していない人が増えている。一般の人たちは、一般の自治会員も含め、自治会が何をしているのか、何をしてくれるのか、あまり知らないし興味をもっていない。自治会の役員は役員で会議をしているだけであり、その場でも新しい意見を言えない雰囲気がある。自治会活動が盛んな自治会の情報を教えてほしい。モデルケースなどを提示してもらい、自治会同士や行政とも交流していければよい。

○地区市民センターの役割があまり理解されていない。単なる市民課業務の代行をしているだけだという認識があり、地域のまちづくりの窓口でもあるという認知不足。地区市民センターに人が集まる仕組みづくりが大事では。子どもに開放するとか、地域の農作物を販売するブースをつくるとか。また、定期的に地区の課題などを地区の住民と話す機会をつくってはどうか。いずれにしろ地区市民センターのフットワークがもっと軽くなれないといけない。

○地域に人が集まるように、そのきっかけをどのようにつくっていくか。音頭をとるのが事業所や市民になってしまうのなら、行政も最初から顔を出し、一体となって地域づくりをしていかななくてはいけない。

B 班

青年会議所（5人）、行政（市2人、社協1人）

青年会議所の方々から出た意見

○民生委員について

- ・誰が民生委員か知らない。
- ・地域福祉計画にともなうアンケート結果では、民生委員を知らない人が3割いた。
- ・自治会の役員をしているので知っている
- ・なり手不足。民生委員自身も社会とつながって楽しいこともあるが、しんどいこともある。
- ・民生委員自身が次の人を探して交代している。
- ・自治会長も、くじ引きの時代に民生委員のなり手を捜すのは難しい。
- ・自治会長も持ち回りで、民生委員のことを理解していない。
- ・民生委員は増やしたいと思っているが、なり手が無い。
- ・地域福祉に関して民生委員任せではなく、地域で支える必要がある。
- ・若者が地域福祉活動にかかわるために人材育成する必要がある。
- ・民生委員について周知の方法を工夫する必要がある。市広報よりベルブのほうを見る人が多い。市広報とベルブを合体すれば、見る人が増えるのではないか。
- ・広報しても民生委員になろうという人はいない。若者向けに勉強会をひらく必要がある。
- ・将来の担い手である子どもが民生委員について勉強するのがいい。民生委員チルドレンを学校行事でやるなど、次世代の担い手を作る。
- ・民生委員自身が自分のことを知ってもらっているはずだと思い込んでいる。
- ・民生委員をサポートする制度があるといい。なり手が問題。自治会の中で、サポートする人をつくるのはどうか。
- ・民生委員にもっと活動費を払うのはどうか。

○地域づくりについて

- ・小さい規模で、まちづくり協議会のモデルタウンを作るのはどうか。
- ・小学校単位ですれば、PTAと一体となり、小学校の空き教室を利用することもできる。
- ・団地全体が高齢化する。30年後を考えて開発する施策をとる必要がある。
- ・高齢化は地域によって偏りがある。高齢化地域に住む若い人には税金を安くする。

○企業と地域について

- ・地域福祉活動と仕事のバランスをとるため企業に協力を求める。サポートした企業には減税や補助金を出す。
- ・地域貢献は売り上げにもつながる。
- ・地域福祉の取り組みをしないとその地域で商売できないくらいにするのが理想。
- ・買い物難民のための移動スーパーをやるのがいい。
- ・各地域に定期的に市場を開けばコミュニティもできる。
- ・拠点になる人にとりまとめしてもらい、売りに行けば、商売も出来て、コミュニティも作られる。

○地域での支えあいについて

- ・地域福祉は、民生委員に頼らなくても地域ので支えていけるのが理想。昔、近所のおじさんに怒られていたことはすなわち見守られていたということ。今は、回覧板を回すときも顔を合わせることなく玄関先に置いてある。
- ・個人情報保護の問題で市からの情報を共有できないので、誰をどう支えるのかわからない。お互いのつながりの中で情報を共有していく必要がある。
- ・近所の情報を共有していれば、助け合える。昔は雨が降ったら洗濯物を取り込みあうコミュニティがあった。今は、見られることを拒否する人もいる。
- ・いろんな考え方があり、支えあいのコミュニティを一方向的に推進することは出来ない。つながることを拒む人もいる。事件が起こる可能性もある。盆踊りも無音で行なう時代である。石取り祭りもうるさいからと避ける人もいる。